

星谷昭子著

蜻蛉日記研究序説

おうふう

著者紹介

星谷昭子（ほしや・しょうこ）

1929年 静岡県沼津市に生まれる。

1952年 日本女子大学文学部国文学科卒業。

現在 日本大学短期大学部助教授。

蜻蛉日記研究序説

平成6年1月5日 初版印刷

平成6年1月10日 初版発行

著者	星谷昭子
発行者	飛鳥勝幸
印刷	美研プリンティング(株)
製本	松栄堂製本

発行所 (株)おうふう (桜楓社)

東京都千代田区猿楽町2-2-6 畑山第一ビル

(郵便番号) 101 (振替) 東京 4-665242

(電話番号) 03-3295-8771 (営業)

03-3295-8774 (編集)

検印は省略しました。

©S. H. 1994 Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが落丁乱丁の際はおとりかえいたします。

ISBN-4-273-02755-0 C3095

はしがき

本書は三部構成になっている。

第一部は、『蜻蛉日記』の主題にかかわる「かげろふ」の語義について考察した。

第二部は、回想体の日記である『蜻蛉日記』において、道綱母の二十一年間の結婚生活の軌跡がどのように意味づけられているか、回想性や自照性という視点から作品の解明を志した。

第三部は、『蜻蛉日記』の文芸性の本質を明かすのに重要と思われる語彙に着目し、その語性や語義を考察したもの、この日記の和歌的性格の一面を位置付けていくための引歌の修辭を検討したもの、道綱母の心の深層と色彩の関連、さらには色彩とこの日記の文芸性との関与について考察したもの等を収めた。表現領域の上から、作品の本質を考察してみようとしたものである。

道綱母の自己内省する自我や男女のありようへの懷疑、さらには、女の不条理に挑戦するかのよう、己の人生の精いっぱいの自己主張を、実人生告白の日記へと展開した経緯。その試みにより、人間存在の認識を得ることができたであろう道綱母の人間像や、蜻蛉日記の本質を、このささやかな小著が、いくぶんなりとも伝えるよすがとなれば幸いである。

蜻蛉日記研究序説

＊

目

次

はしがき

I

一 『蜻蛉日記』 書名考	10
--------------------	----

II

一 『蜻蛉日記』 の作者の結婚	32
—— 兼家の妻として ——	

二 『蜻蛉日記』 の世界	55
—— 道綱母の心情を中心に ——	

三 『蜻蛉日記』 の女人像	76
---------------------	----

Ⅲ

一 『蜻蛉日記』の語法	98
-------------------	----

——「ものす」という独自の表現について——

二 『蜻蛉日記』における引歌について	139
--------------------------	-----

——『古今集』を中心に——

三 『蜻蛉日記』における色彩	163
----------------------	-----

『蜻蛉日記』年表	201
----------------	-----

あとがき	210
------------	-----

蜻蛉日記研究序説

一 『蜻蛉日記』書名考

『蜻蛉日記』の書名については、すでにいくつかの優れた研究がある。しかし、私は「かげろふ」の語義について、陽炎説が大勢を占めることに疑問をもったのである。一つは、蜻蛉日記における陽炎説の引用歌とされる後撰集の「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬるよなれば」の「かげろふ」の語義が、源氏物語研究者においては、「蜉蝣」と解釈されていることが多いのである。その二は、道綱母の人生と日記執筆の意図を考察したとき、「かげろふ」は「陽炎」ではなく「蜉蝣」の方が妥当であるように思われるのである。これらの点については、『国文学』（学燈社昭和63年12月号）の小論「蜻蛉日記書名考」において私見を述べたが、本稿ではさらにこの問題を細説し、「書名考」を補強するものである。

—

道綱母は、『蜻蛉日記』上巻末において自ら書名についてふれている。

かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をし嘆けば、声あらたまるもよろこばしからず、なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心地する、かげろふのにきといふべし。

とあるところから、『蜻蛉日記』と呼称されるようになったのである。

なお、大鏡第四卷（兼家伝）に

道綱ときこえて、大納言までなりて、右大将かけたまへりき。この母君は、きはめたる和哥の上手におはしければ、かの殿の通はせたまひけるほどのこと、哥などかきあつめて、かげろふのにきと名づけて世にひろめたまへり。

とあり、古本説話集（「長能道濟事」第二十六）にも

ながたうは、かげろふのにきしたる人のせうと。

とある。また、八雲御抄に「遊士日記」、明月記に「蜻蛉日記」、本朝書籍目録に「蜻蛉記」とあり、田中大秀は「陽炎日記」「遊絲日記」と書いている。このように古くからこの書名で流布されてきたのである。しかし、陽炎、蜻蛉、遊糸、蛭蛸いずれも「かげろふ」と訓まれていたため、語義上、どの漢字を宛てることが妥当であるかが、諸家により論じられてきたところである。^①大鏡の現存諸本はいずれもかなぎであるが、鎌倉期になるといくつかの漢字が宛てられている。

以後、「陽炎説」「遊糸説」「陽炎・蜉蝣のいずれにも解される」などの諸説が生まれ、現在は、「陽炎説」が大勢を占め、定着した観がある。「陽炎説」定着化の現状を、諸家の見解により示したい。

(1) かげろふの日記解環 題号弁 坂徴（天明五年）

今世流布の印本、蜻蛉日記と題書せり。蓋は源氏物語に、かげろふの巻ありて、多くは、蜻蛉とかけるに、おのづから習へるにやと思はる。愚、おもへらく、此日記上の結語に、「物はかなきを思へば、有ルかなきかの心ちする、かげろふの日記」と、仮名にてあり。此日記を、大鏡にいへるにも同じく、右のやうにかけり。されば、日記にいへる所の、かげろふは、莊周がいはゆる野馬にして陽炎也。詩にも作れる所の、遊絲に同じ。且、此日記を、八雲御抄学書篇の私記に、遊士の日記とあげたり。士と、絲の字とは、和音のとなふる声同じきによりて、蓋シ印本に、うつしあやまりしとおもはれて、これ一の証拠なり。……蜻蛉は、世俗にいへる、とんぼなれば、至りてちひさきものにあらず。あるかなきかと、いはんやうもなし。……」

(2) 蜻蛉日記講義 喜多義勇（至文堂 昭和36・12）

後撰集に「世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかの程にぞありける」「あはれとも憂しともいじかげろふのあるかなきかに消ぬる世なれば」の如きがある。「かげろふ」は、「かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとも思はざらなむ」（空穂物語）の「ほのめく」及び前歌の「消ぬる」という所を考えると、いわゆる陽炎を指すものであろう。

(3) 蜻蛉日記全注釈 柿本奨（角川書店 昭和41・11）

当時は、とりとめもないものを「かげろふ」に譬えていう習わしがあった、「あるかなきか」を冠した本日記の「かげろふ」は陽炎の義。その証歌として、宇津保物語の挿話や「世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ」（古今六帖・第一かげろふ）「あはれとも憂しとも言はじかげろふのあるかなきかに消ぬる世なれば」（後撰集・雜二・一一九二よみ人しらず）「世の中と言ひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞありける」（後撰集・雜四・一二六五よみ人しらず）をあげられる。

(4) 蜻蛉日記の研究 上村悦子（明治書院 昭和47・3）

「かげろふ」についての語義を詳説され、平安時代の勅撰集の和歌、古今六帖、宇津保物語などの用例を示し、蜉蝣、遊糸（ヨサマア）、蜻蛉でなく陽炎であるとする。しかし、陽炎の現象自体を指すというよりも、陽炎の現象が実体なく空しくはかないところから、「あるかなきかの」の枕詞や譬喩として用いられ、はかなき身の上を表わす象徴的用語とされる。

他に蜻蛉日記新注釈・大西善明氏（明治書院）、蜻蛉日記ほか・木村正中氏・伊牟田経久氏（小学館）、かげろふ日記全評解・村井順氏（有精堂）、かげろふの日記新釈・次田潤氏・大西善明氏（明治書院）、かげろふ日記抄・三宅清氏（私家版）、いずれも陽炎説を説かれている。また、かげろふ日記・増田繁夫氏（日本古典新書）は源氏物語蜻蛉の巻の例をあげながらも、陽炎説を支持される。

(5) かげろふ日記 川口久雄（岩波書店 昭和42・4）

「かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとも思はざらなむ」（空穂・俊蔭）「世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ」（六帖・一・かげろふ）をあげ、「かげろふ」は中晩秋又は初春、快晴の日ある種の蜘蛛の子が糸を出して風に乘じて空を浮遊するもの。遊糸、いとゆふ、雪迎えとも Gossamer に当る。文選の沈約、千載佳句の春興、菅家文章、田氏家集などの例をあげられる。

川口氏のみ遊糸説をとられるが、如上のごとく陽炎説が大勢である。しかし、この陽炎説に疑問があるので、これについて私見を述べてみたい。そのため、まず「かげろふ」の語義について考える必要がある。

二

「かげろふ」の語義は、陽炎、蜻蛉、蜉蝣、遊糸の四つに大別される。その原義について大野晋氏の説は、「Kagirolu の Kagi はチラ・チラ・光るものを言い、ro は助詞。r は乙類火と同音で、陽炎の立つさまが炎に似るといふ。したがって奈良時代ではチラチラ燃ゆる火や日光が赤くさす意や陽炎の意に用いられた。」とされる。この原義を基に「かげろふ」は陽炎、蜻蛉、蜉蝣、遊糸と時代により語義に広がりをもせているが、諸家の考証をたどり略記する。

- (1) 陽炎は、日光を受けてきらめくように地面から立ちのぼる気の意である。古事記・履中天